



第 1 日

国 語

(9 : 3 0 ~ 1 0 : 2 0)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて7ページあり、問題はーから三まであります。これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第 番
------	-----

一次の文章には、いつも川で魚を捕っている心平が、前回逃げられた雨鱒あめうしを捕まえるため、秀二郎しゅうじろう爺ぢつちやに捕り方を教えてもらって川に行つたときが描かれています。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

空はどんよりと曇っていた。重い雲が低くたれこめ、ゆつくりと東に流れていた。遠く①の山並みは厚い雲に隠れて見えなかった。風はなく、川の風景は暗く沈んでいた。川の中も暗かった。よく眼めをこらして、しばらく眼がなれてくるまで水中をみていないと、よく見えなかった。それでも、眼がなれてきても、遠くまでは見えにくかった。

心平はいつにも増して、②入念いねんに勢い止めの中を探つた。丸太の陰と大きな石のまわりは特に慎重に探つた。そのたびに、心平は緊張し、期待に胸をときめかせた。しかし、ウグイやヤマメはいたが、雨鱒はいなかった。そうやって、丸太を組んだ升目のひとつひとつを水門の方から対岸の森の方へと移動した。ウグイやヤマメはほうつておいた。①いまはそんなものはほしくなかった。ウグイやヤマメを突いて音を立てるのがいやだった。音を立てて、雨鱒を刺激するのがいやだった。ウグイやヤマメは、その気になればいつだって捕ることができるのだ。

ふいに、大きな魚影が心平の眼を横切つた。心平はすぐに雨鱒だとわかつた。まだ勢い止めから離れずにいたのだ。「いた！」心平は水面から顔をあげていった。いつもの儀式③だった。心平はいそいで水中をのぞき込むと、みうしなつてなるものかと眼を見開いて雨鱒のうしろ姿を

追つた。雨鱒は背中はなてんの白い斑点をゆらめかせて、大きな丸石の向こう側に消えると、すぐに一回りしてまた姿をみせた。雨鱒は、大きな石と石の間から身を乗り出すようにして静止すると、じつと心平をみた。ゆつたりと呼吸していた。背ビレと胸ビレもゆつたりと動かしていた。一点に静止するための動作だった。

ヤスを突くには遠すぎたので、心平はそつと近づくことにした。心平は身をかがめて近づいた。心平が近づいても、雨鱒はじつと心平をみているだけで、逃げるようなそぶりはちつともみせなかった。距離が縮まると、雨鱒の背中の斑点がはつきりとみてとれた。実にきれいだった。心平はもう一歩前進した。川床の砂が少し舞いあがった。雨鱒はまだじつとして動かなかつた。大きな眼が心平をみていた。心平はさらに雨鱒に近づいた。今度はヤスがとどく距離だった。しかし、もう少し近づけば万全だったので、心平は a が、意を決して近づぐことにした。心平はそつと注意して近づいた。まだ雨鱒は逃げなかった。もう、雨鱒は手のとどきそうな距離になつていた。心平は緊張した。ゆつくりと、慎重に前進した。心平は、心臓の鼓動が大きくなつていのがわかつた。初めて魚を突いた時もこんな感じだったが、いま心平はそのことは忘れていた。眼の前の雨鱒のことしか頭になかつた。

心平はヤスを身体からだの脇わきに引き寄せると、緊張して持つ手にギュッと力を入れた。左手でしつかりと丸太をつかんで、バランスがくずれないように身体を支えた。丸太はぬるぬるしてすべつたので、心平は身体を支えるだけにした。それだけでも心強かつた。雨鱒を突く体勢はすつかり

④ 整った。あとは、秀二郎爺っちゃんに教えてもらった手順を素早くやつてのければよかった。心平は、もうヤスの重さは感じていなかった。口が渴いて、ドキドキする心臓の、大きくて早い **b** だけが感じられた。心平は、雨鱒に悟られないように、注意して、そつと、ヤスの穂先を雨鱒の頭上に持つていった。それでも、雨鱒は動かなかつた。心平は、もうひと呼吸、そつとヤスの穂先を近づけた。雨鱒の頭上で、切っ先の狙いがピタリと定まった。あとはいっきに突けばよかった。すると、心平は急に手が震えた。刺激が強すぎたのだ。ヤスの穂先がブルブルと震えてしまった。その瞬間、雨鱒はあつという間に反転して、石の向こう側に消えてしまった。「はい！ 逃げられだじゃー！」心平はがっかりした。水中をのぞいたまま声に出していった。

緊張がとけていった。急にヤスが手に **c**。その時、心平は初めて背中に水滴が落ちたのを感じた。いつの間にか雨が降ってきたのだつた。雨は、まだポツリポツリと散発的だつた。気温がぐつと下がり始めたのがわかつた。心平は立ちあがると、笑つてため息をついた。「はあ、ドキドキしたあ。」と心平はいつた。逃げられたのはがっかりしたけど、もう少しのところまで追い詰めたことがうれしかつた。次の機会にはきつと仕留めることができる。希望と自信が、少年の胸にふくらんでいった。

(川上健一 「雨鱒の川」による。)

(注) 勢い止め 丸太を組んで、川の水の勢いを弱めている場所。

ヤス 水中の魚を突き刺して捕らえる道具。

1 ①④の漢字の読みを書きなさい。

2 **a** にあてはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア うまくやるぞと勇んだ イ うまくいったぞと浮かれた
ウ どうしようかと迷つた エ どうにもならないと嘆いた

3 **b** にあてはまる最も適切な語を、第四段落の中から抜き出して書きなさい。

4 **c** にあてはまる適切な表現を、五字以内で書きなさい。

5 **1** ウグイやヤマメはほうつておいたとあるが、心平がウグイやヤマメをほうつておいた理由が、大きく分けると二つあります。二つの理由を、それぞれ十五字以内で書きなさい。

6 次の文章は、雨鱒に逃げられたあとの心平の気持ちの変化について述べたものです。空欄Ⅰにあてはまる最も適切な語を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

雨鱒に逃げられたとき心平は(Ⅰ)したが、その後緊張がとけていく中で新たに喜びが生じた。雨鱒を追い詰めたことから(

Ⅱ)と確信し、そのことが心平にとって喜びとなったのである。

ア 期待 イ 落胆 ウ 感動 エ 困惑

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

急いでいる時に、電車を待つのは誰だれでもイライラするものである。電車が行ったばかりだったりするとなおさらである。そんな時、ホームの天井からぶら下がっている案内板に「前の駅を出しました」という表示が出ると、あと数分待つにも拘かかわらずイライラが少し解消に向かう。

先日も大事な会議に遅れそうで、僕はかなりイライラして地下鉄を待っていた。その路線は「前々駅を出しました」という二駅前の①ジヨウホウが表示される路線で、その表示が出た途端、これなら辛うじて間に合うなど、ほっとして僕のイライラも瞬またく間に消えていった。もしその「前々駅を出しました」がなければ、来る直前までものすごく気を揉もみ胃が痛くなってしまっていたはずである。これは、電車の本数を増やすとか、乗り心地をよくするとかに匹敵するサービスだったんだと改めて僕は感心していた。

そして数分後に電車は予告通りホームにすべりこんできた。ドアが開き僕は乗り込んだ。普通、人はそれまでの①関心事がすっかり解決した途端、何事もなかったかのように次の関心事に移る。僕も普段なら一人の乗客として空いてる席を見つげるとかするだろうが、その時は気づいたばかりの「案内板のイライラ解消作用」を相変わらず引きずって考えていた。

そして電車が動き出した瞬間、ある事をさらに発見して思わず小さくあつと叫んだ。それは「僕のイライラがさつき消えたということとは、ち

ようど今頃いまごろ、次の次の駅にいる人たちのイライラも消えているということだ！」ということであった。自分が数分前に享受した「前々駅を出しました」の表示による作用が、今や二駅先のホームにいる人たちのイライラに対して及ぼされていると思うと当たり前ではあるが、何か妙に面白かったのだ。あつと叫んでしまったのは、イライラしていただけの乗客から別の視点をもつ人間にカチッと切り替わった瞬間の小さな驚きのせいであった。

この「視点の切り替え」は、従来から映画や小説の手法としては時々使われるのだが、その時はそんな解説的な態度ではいられないほど、その時急に思い出した。かなり③ムカシ、友人が外国で観みてきた博覧会のパピリオンの話をしてくれたことがあり、僕はそれにひどく感心したのだった。人気のあるパピリオンにとつて待ち時間の長い行列は悩みの種である。メインの本展示に予算を取られて、出展者は外の行列に対してまで何らかの演出を施す余裕はない。b、そのパピリオンは延々と続く長い行列に来場者が飽きる頃に、なぜかみんな振り返って一様にこやかになるというのだ。一体どうして？ と友人に尋ねるとなるほどと思わせる回答が返ってきた。そのパピリオンは、入り口が二階にあり、階段を昇る造りになっていて、ふと振り返ると今まで自分が並んでいた列が動物の一筆書きのイラストになっている、というものであった。来場者はくねくね曲がりくねった導線を単なる行列の道としか思わ

ないが、少し距離をもつて上から見下ろすとなんと楽しい展示になっていたのだ。階段の上まで来た人は、自分がその展示のパーツを務めていたことや、先人たちがなぜ振り返つてにこやかにになったのかの秘密がわかりとても楽しくなるのである。ここでは、展示の一部としての自分とそれを楽しむ観客としての自分という「視点の切り替え」がエンターテインメントとしてうまく使われていたのだ。

「視点の切り替え」の重要性はみんな理解していると思うが、僕はその時に生まれる切り替えスイッチのこのカチッという気持ちよさこそ、人間が生きている証あかしのような感じがする。あのパピリオンで階段の上から振り返つてにこやかになっている観客の顔を僕は話だけでも容易にソウゾウでき、自分までも愉快になった。

(佐藤雅彦 「毎月新聞」による)

(注) エンターテインメント || 娯楽。

パピリオン || 博覧会の展示用に一時的に設けた建物。

1 ①④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2 a にあてはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア イライラした状態がつまらなく
- イ イライラした状態が面白く
- ウ カチッという感覚がつまらなく
- エ カチッという感覚が面白く

3 b にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア すると
- イ しかし
- ウ または
- エ なぜなら

4 1 関心事とあるが、筆者が地下鉄のホームでイライラして電車を待つていたとき、筆者にとつてどのようなことが関心事だったのですか。二十字以内で書きなさい。

5 2 それは、何を指していますか。文章中から二字で抜き出して書きなさい。

6 この文章において、筆者は、「筆者の電車での体験」と「友人のパピリオンでの体験」を例にあげて、視点を切り替えて一つの事象をとらえたときの気づきについて述べています。文章の内容を整理した次の表の空欄c・dにあてはまる適切な表現を、空欄cは五十文字以内、空欄dは二十文字以内でそれぞれ書きなさい。

筆者の電車での体験	自分の乗った電車が動き出したこと。	事象	事象についての気づき
友人のパピリオンでの体験	d	c	上から見下ろす人にとって、下にいる人たちが動物の一筆書きのイラストになっている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

陸奥の仙台の錦織唐麿、幼けなき時ものに行きて帰る時、ある山里

幼少の ある所

を通りけり。夏の初めなれば、時鳥の初音を聞きて、

家苞いへづとにならぬばかりぞ恨みなる親もまたれし初時鳥
家へのみやげ

と詠みたり。さて家に帰りて、たちねの前に出でて、「今日なん時鳥

母親

の初音聞き侍りける程に、苞はになるべきものならましかば、たちねの

もしみやげにできるものだったなら

いたくぞ喜び給ひなましと1思ひにたれど、かひなくてただかかる歌の
とてもお喜びになるだろうにと思つていたけれども

どうにもならなくて このような

み詠みて帰りぬ。」と申しければ、たちね聞きて、「時鳥の初音聞きた

聞くより

らんよりは、汝なんぢが詠みつる歌聞くこそ、うれしき心地するなれ。」とぞ

云はれける。折柄空に時鳥の鳴きければ、たちねもろともに「あれ鳴

ちょうどそのとき

あつ、鳴

きはしは。」と云ひければ、唐麿3とりあへず、

すべに

家苞いへづとになりし事こそうれしけれ

と、4上の句をなほしけるとなり。

とじうことである

〔「猿著聞集」による。〕

(注) 陸奥 〓 今の青森・岩手・宮城・福島県と秋田県の一部。

錦織唐麿 〓 江戸時代の医師。

時鳥 〓 鳥の名。古くは夏を知らせる鳥として親しまれた。

初音 〓 その季節に初めて聞く鳥などの鳴き声。

上の句 〓 和歌の五・七・五・七・七の五句のうち、はじめの三句。

1 思1ひにたれど1の主語は何ですか。次のア～エの中から適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア 錦織唐麿 イ 時鳥 ウ たらちね エ 筆者

2 うれしき心地2するなれとあるが、母親は何を聞くことがうれしいと言っているのですか。現代の言葉で、十字以内で書きなさい。

3 とりあへず3を、現代かなづかいで書きなさい。

4 上の句をなほしける4について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 唐麿が上の句を直したあとの和歌を書きなさい。

(2) 上の句を直したときの唐麿の気持ちはどのようなものであったと考えられますか。「……ことを……気持ち。」という形式によって、

現代の言葉で書きなさい。